# 日本橋水景プロジェクト

近年の東京における再開発は活発に行われている。しかし、どの再開発を挙げてみても経済面積、容積率の向上を考えるあまり、超高層建築ばかりが林立し、似たような都市景観を作り出している。このような風土性・場所性を無視した計画ばかり行われていれいては国際都市東京としてのアイデンティティのない都市となってしまう。
そんな中、日本橋地区はほかの再開発地区と違い、現在首都高速道路によってふたをされている日本橋・日本橋川の景観問題から再開発が始まっており、今までにない文化・風土を意識した都市再生になりえる。

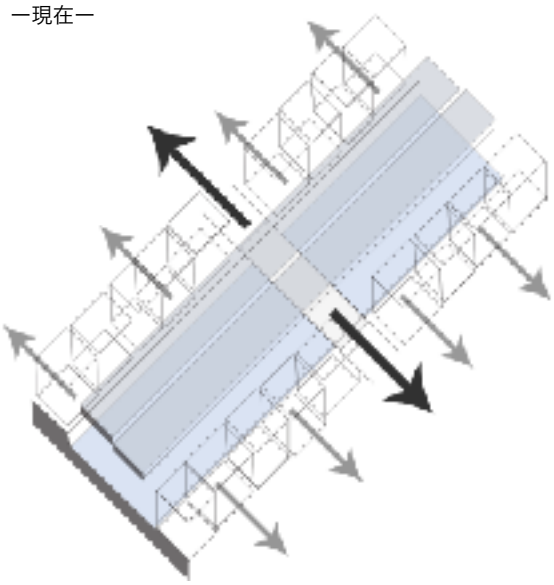
東京の前身である江戸は水運網の骨格によって都市が作られており、都市における水辺は陸と水路の中継点として重要な役割を果たしていた。その水辺では水と陸との情報交換場所であっただけでなく、庶民の過剰に密集した生活環境の中、水辺は憩いの場として利用された。橋詰では水路と陸路のが交差する交点であり、公共の情報や商売の情報などが集まる場所、人と人の交流の場所でもあった。そして、それらの水辺・橋は人工物と自然との対比によって作られた名所としても扱われた。

日本橋の文化・景観の観点から再開発を行う上で、現在の陸上からの視点から考えられるべきではなく、水辺からの視点からも重要なこととなってくる。江戸時代のように水辺に開かれた都市構造の構図を再生することで生きた水辺や日本橋を中心とした美しい名所を作ることができ、日本橋地区の風土に適した景観をつくりだすことができる。

水辺や橋詰に交流型オフィスや公共施設、老舗の商業空間など人々が集まりやすい機能をおき、舟運の再生による水辺からの視点も再生する。このように水辺を開放するプログラムを組むことで、貴重な水辺空間を生活に結びついたオープンスペースとして扱うことができ現代要素も取り込んだ名所として再生することができる。

## 水辺空間の利用

ー現在ー



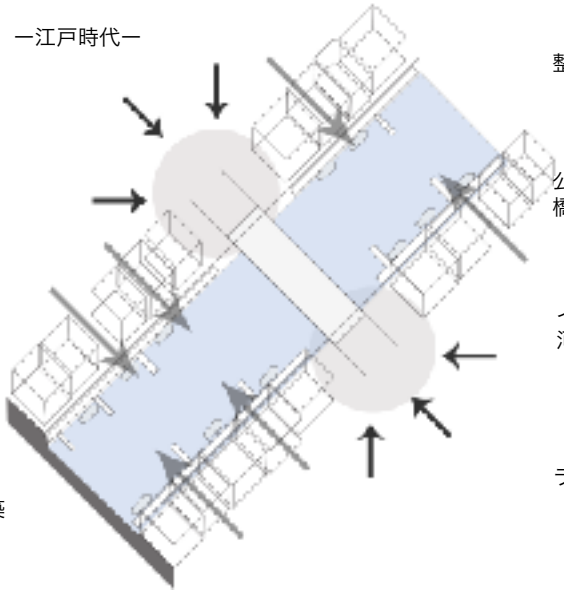
首都高速道路の高架

近隣ビルによる
河川の閉鎖性

通過交通としての橋

ぎりぎりに建つ中高層建築

ー江戸時代ー



整備された河川

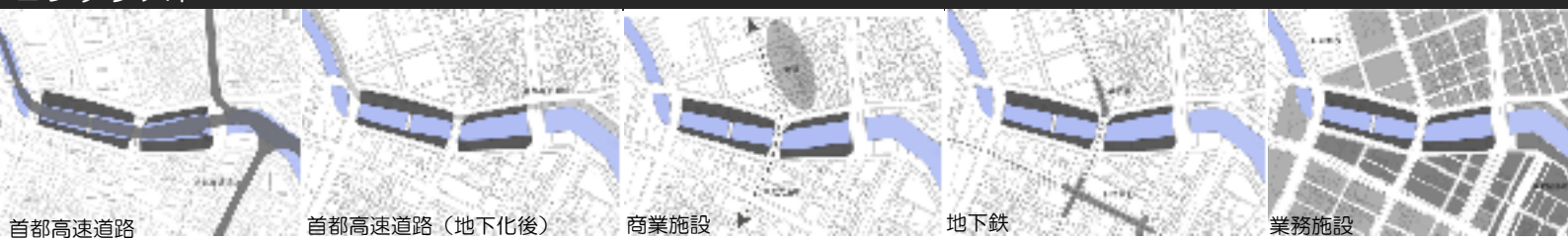
公共空間としての
橋詰

インフラとしての
河川利用

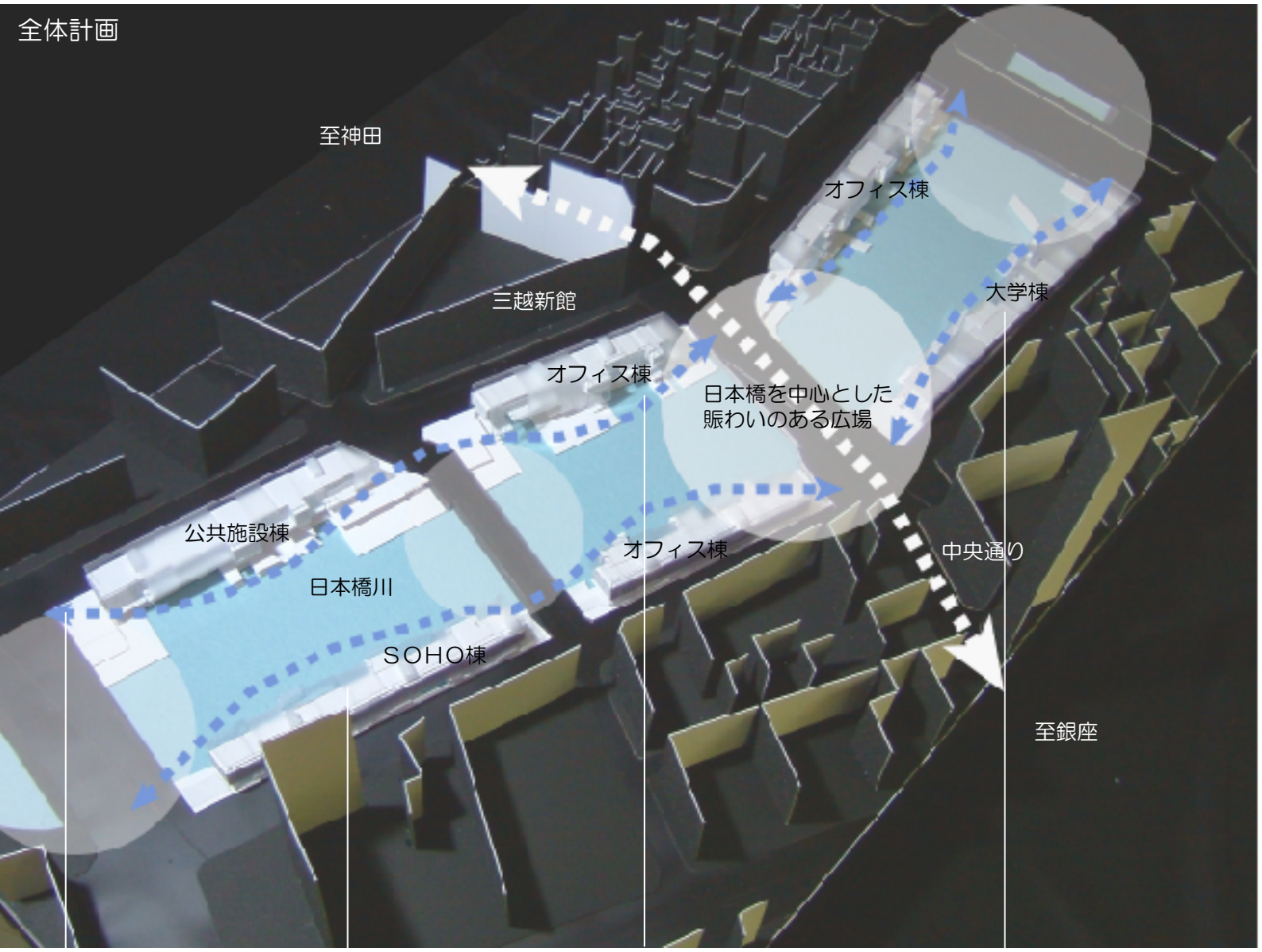
ランドマークの橋

## 現在の日本橋の現状

## コンテクスト




## 全体計画

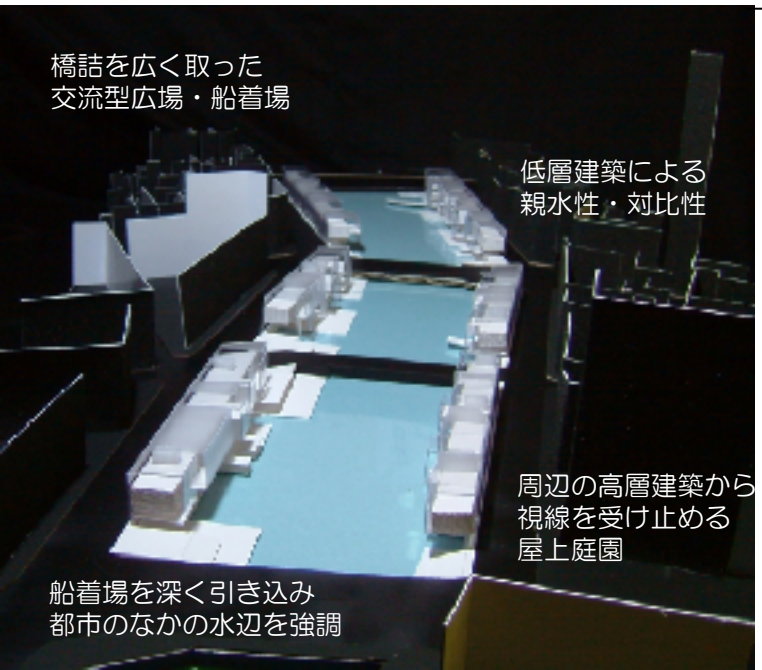



水際に新たな散策路を
作り出す

凹凸のある形状による
統一感・親水性

全施設にある船着場・親水公園

地上レベルはすべて開放し、
水辺に視線を向かせる



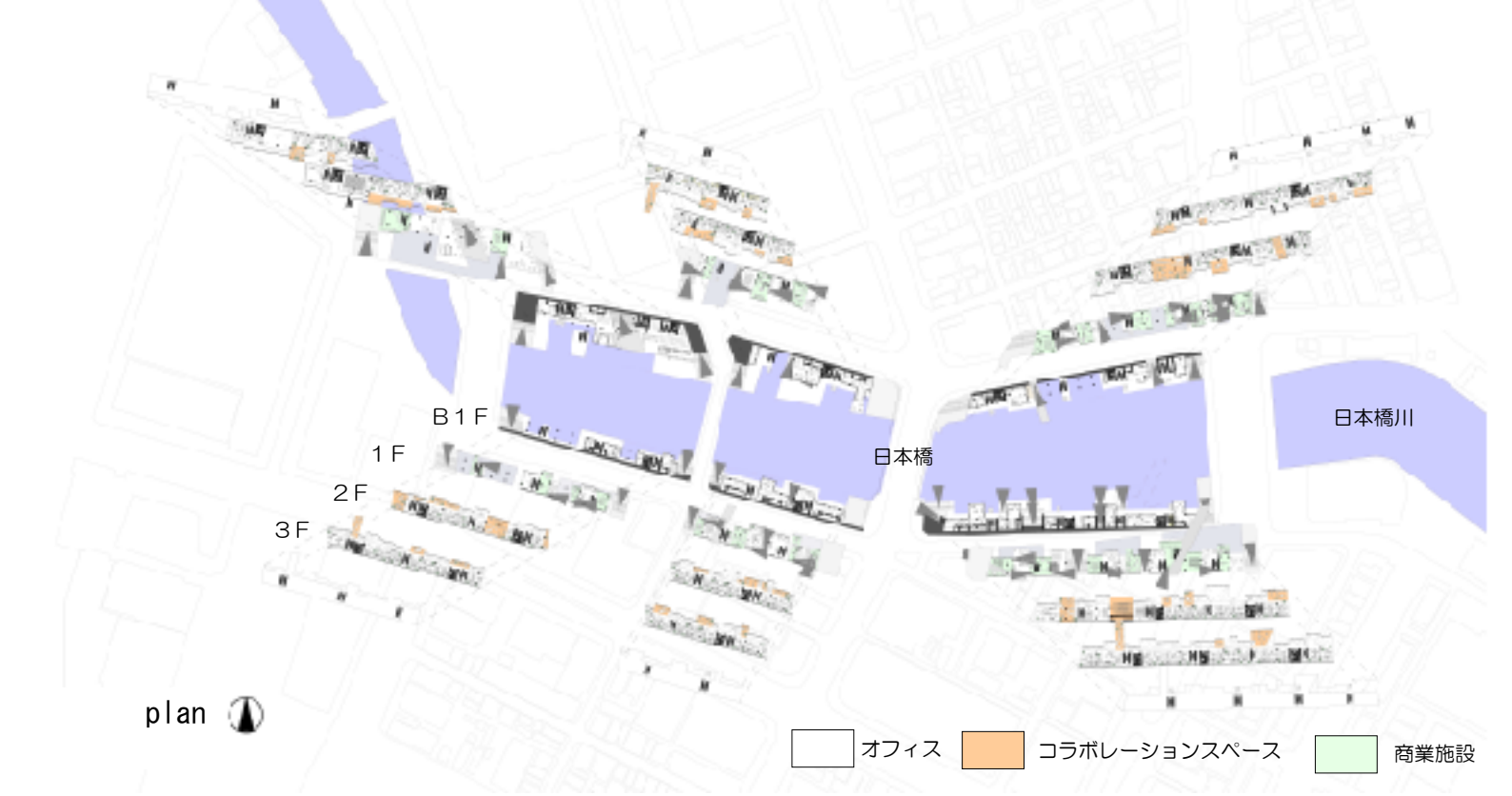

## マスタープラン

首都高速道路が地下化したという前提の上で、日本橋・日本橋川の景観・文化から再構築を行う。そして日本橋が重要視され、名所として扱われた江戸時代の構図を利用する。

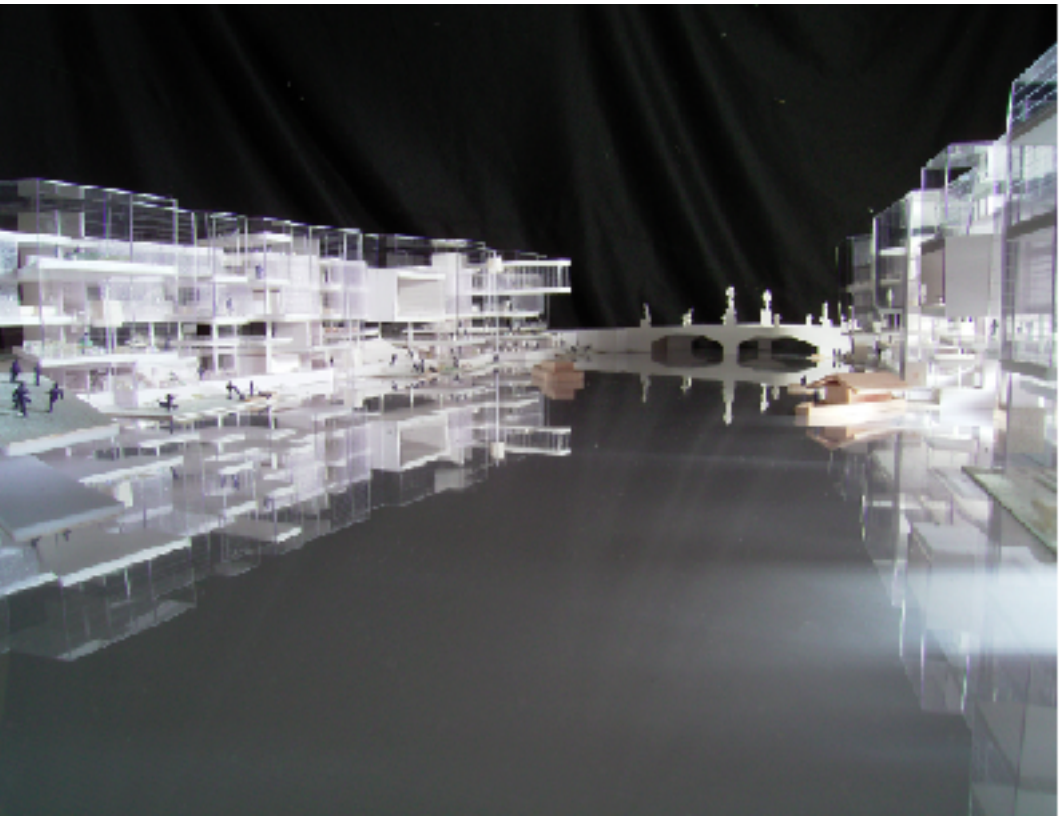
江戸時代の日本橋は、陸と水路の交差する情報の集約点であり、密集する生活環境の中での庶民の憩いの場であった。また、水辺と都市と対比性を生かした名所でもあった。現在は正反対の構図を持つが、現在の構図と融合した計画を作り出す。

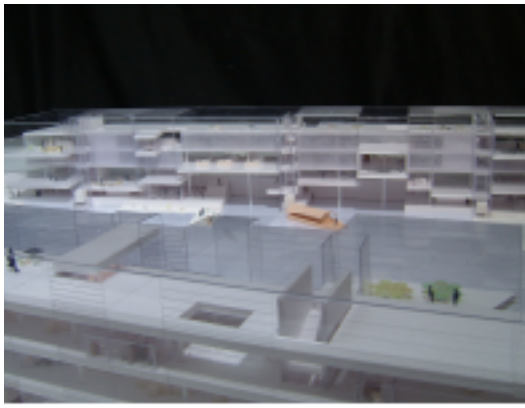
再開発が行われている周辺の丸の内、神田、八重洲、京橋などは高密度・高容積の建築が建つはずであり、そうなれば余計、都市のオープンスペースである日本橋・日本橋川は重要な憩いの場となりえる。また、もともと高札場があり、人と人、人とモノの交差する情報の集約点であった日本橋地区は現在の高密度な業務施設を生かし、再び人と人、人とモノが集まる集約点になるためのブランド性を持っている。

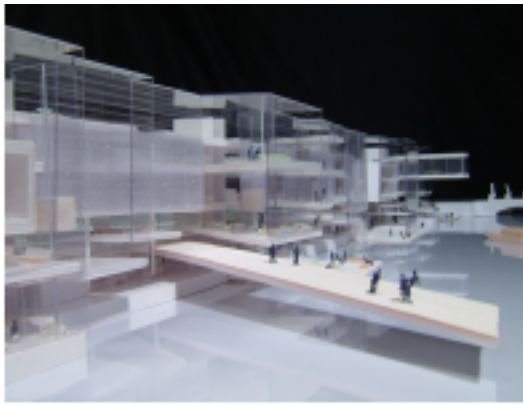
今回の計画では、建築を水辺から離して計画し、水辺と周辺をつなぐ関係を確保する。また水辺側に「水の道」という散策路を作り出し、親水性公園やカフェを配置する。地上部を都市に開放し、2層以上を人と人との関係を作り出すシェアオフィスや社会人が主に使用する社会人大学を計画する。シェアオフィスでは水辺に面して流動性のあるコラボレーション施設（プレゼンルーム、カフェ、フィットネス・・・）を配置し、動きのある施設を作り出す。


B１F
１F
２F
３F
日本橋
日本橋川
plan
オフィス
コラボレーションスペース
商業施設

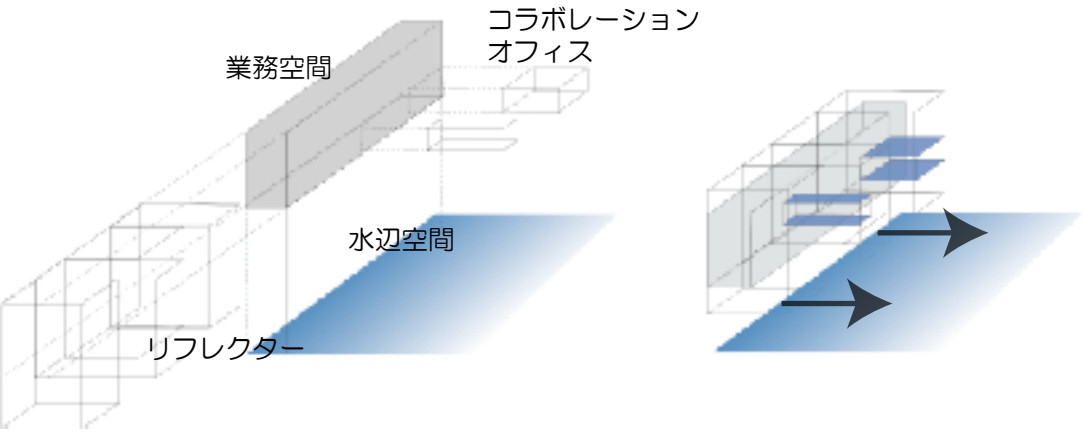
elevation

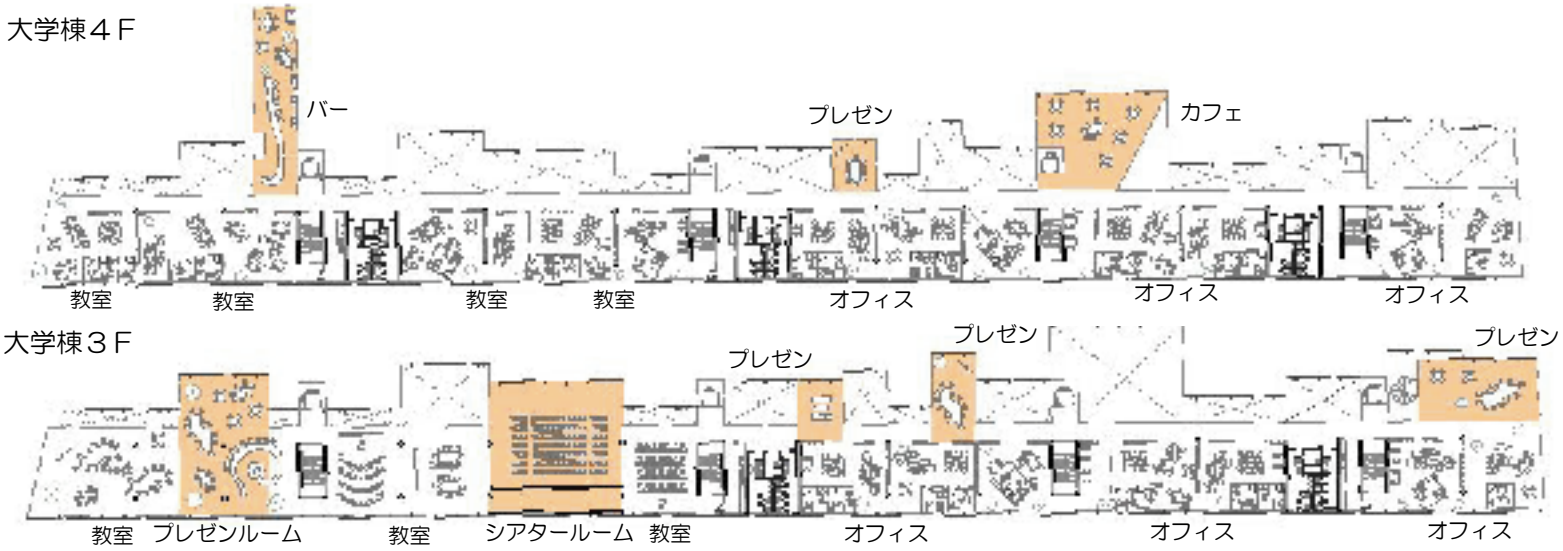
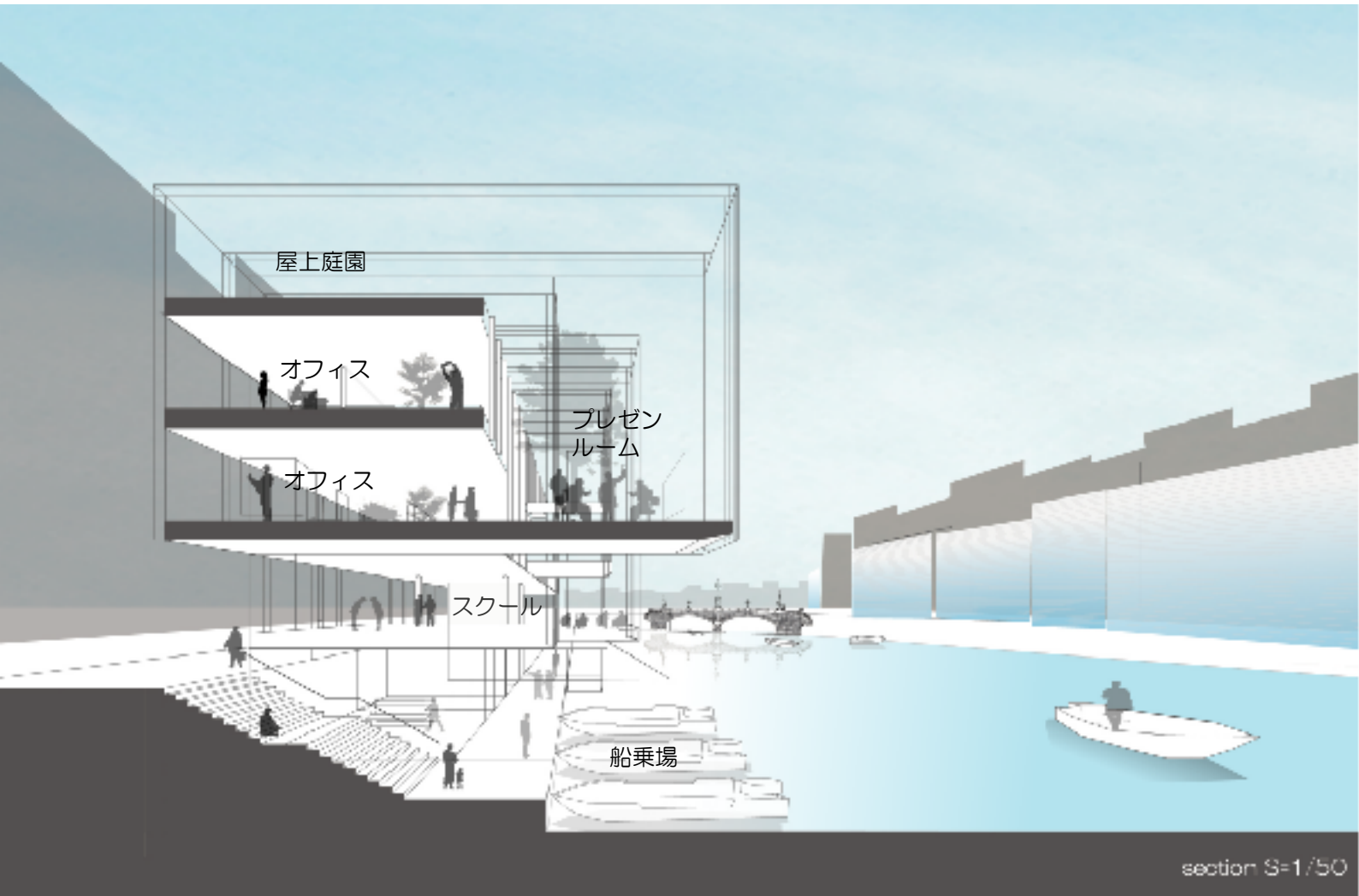






施設（シェアオフィス）の構成




基本となる個人スペースを集合したシェアオフィス、レンタルオフィスを構築し、そのオフィス棟に交流を促すラウンジやカフェテリア、レストラン、フィットネスなどを備え付ける。ワークスペースとリフレッシュスペースを明確に分離させるのではなく、リフレッシュスペースでも業務が行えるように計画する。創造を促す空間構成をするために、リフレッシュスペースは天井高のさまざまなボックスが並ぶ構成にする。社会人大学もひとつのシェアする機能と考え、オフィスの中に組み込み、偶然のビジネスチャンスや人の交流を生み出す。